

土とふるさとの文学全集

4



土とふるさとの文学全集

4

土に生きる

土に生きる

昭和五十一年六月二十日 発行

編集人

白井 吉見
小田 切秀雄
瀬沼 茂樹
水 上 勉
和 田 傳

発行者 高橋 芳郎

東京都新宿区市谷船河原町十一(一六二)

発行所 法人 家の光協会 ©

電話 (260) 三一五一(大代表)

振替 東京 5 | 4 7 2 4

印刷 三松堂印刷株式会社
製本 寿製本株式会社

土とふるさとの文学全集 ④

土

長塚節
5

村に闘ふ

犬田卯
171

沃土

和田傳
324

耕土

山田多賀市
414

解説

南雲道雄

552

年譜

569

■装丁

伊藤憲治

■編集協力

南雲道雄

葦山圭介

赤星虎次郎

長塚 節

一

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごろつと打ちつけては又ごろつと打ちつけて皆瘦こけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひゅうひゅうと悲痛の響を立てて泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつつ目叩いた。そうして西風はどうかするとぼったり止んで終ったかと思う程静かになった。泥を拗切つて投げたような雲が不規則に林の上に凝然とひつついていて空はまだ騒がしいことを示している。それで時々は思い出したように、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄に心ぼそくなった。

お品は復た天秤を卸した。お品は竹の短い天秤の先へ木の枝で拵えた小さな鍵の手をぶらさげてそれで手桶の柄を引っ懸けていた。お品は百姓の隙間には村から豆腐を仕入れて出では二三カ村を歩いて来るのが例である。手桶で持ち出すだけのことから資本も要ない代には儲も薄い

のであるが、それでも百姓ばかりしているよりも毎日に目に見えた小遣銭が取れるのもう暫くそうしていた。手桶一提の豆腐ではいつもの処をぐるりと廻ればきつとなくなった。還りには豆腐の壊れて幾らか白くなった水を棄てて天秤は軽くなるのである。お品はいつでも日のあるうちに夜なべに縄を縛う藁へ水を掛けて置いたり、落葉を攫って見たりそこらこらと手を動かすことを止めなかった。天性が丈夫なのでお品は仕事を苦しいと思ったことはなかった。

それはこの日は自分でも酷く厭であつたが、冬至が来るから菟藟の仕入をしなくちゃ成らないといつて無理に出たのであつた。冬至というに俄商人がぞくぞくと出来るので急いで一遍歩かないと、その俄商人に先を越されてしまうのでお品はどうしても凝然としてはいられなかった。菟藟は村には無いので、仕入をするには田圃を越えたり林を通ったりして遠くへ行かねばならぬ。それでお品はその途中で商をしようと思つてこの日も豆腐を担いで出た。生憎夜から冴え切っていた空には烈しい西風が立つて、それに逆つて行くお品は自分で酷く足下のふらつくのを感じた。ぞくぞくと身体が冷えた。そうして豆腐を出す度に水へ手を刺込むのが、慄えるように身に染みた。かさかさに乾燥いた手が水へつける度に赤くなつた。輝がびりびりと痛んだ。懸念なそこでお品は落葉を一燵べ焚いて貰つては手を翳して漸と暖まつた。菟藟を仕入れて出た時はそんなこんで暇をとつて何時になく遅かつた。お品は林を幾つも過ぎて自分の村へ急いだが、疲れもしたけれど懶いような心持がして幾度か路傍へ荷を卸しては休みつつ来たのである。

お品は手桶の柄へ横たえた竹の天秤へ身を投げ懸けてどかりと膝を折つた。ぐつたり成つたお品はそれでもくもく見目な姿が更に検束なく

乱れた。西風の余波がお品の後から吹いた。そうして西風は後で括った穢い手拭の端を捲って、油の切れた埃だらけの赤い髪の毛を抜きあげるようにしてその垢だらけの首筋を剝出にさせている。それと共に林の雑木はまだ持前の騒ぎを止めないで、路傍の梢がずつと繞ってお品の上からそれを覗こうとすると、後からも後からも林の梢が一斉に首を出す。そうして暫くしては又一斉に後へぐつと戻って身体を横に動揺ながら笑い私語くようにざわざわと鳴る。

お品は身体に変態を来したことを意識すると共に恐怖心を懷き始めた。三四日どうもなかったのだから大丈夫だとは思って見ても、こう儼然としていると遠くの方へ滅入ってしまう様な心持がして、不斷から幾らか逆上性でもあるのだがそう思うと耳が鳴るようで世間が却て静かに成ってしまったように思われた。不図気が付いた時お品ははきはきとして天秤を担いだ。林が過ぎて田圃が見え出した。田圃を越せば村で、自分の家は田圃のとおりつきである。青い煙がすつと騰っている。お品は二人の子供を思って心が跳った。林の外れから田圃へおりの処は僅かに五六間であるが、勾配の峻い坂でそれが雨のある度にそこらの水を聚めて田圃へ落す口に成っているので自然に土が抉られて深い窪が形られている。お品は天秤を斜に横へ向けて、右の手を前の手桶の柄へ左の手を後の手桶の柄へ掛けて注意しつゝおりた。それでも殆んど手桶一杯に成りそうな蒺藋の重量は少しふたつく足を危く保たしめた。やっと人の行き違うだけの狭い田圃をお品はそろそろと運んで行く。お品は白茶けた程古く成った股引へそれでも先の方だけ繕ぎ足した足袋を穿いている。大きな藁草履は固めたように雪解の泥がくっついて、それがぼたぼたと足の運びを鈍くしている。狭く連っている田を豎に用水の堀があ

る。二三株比較的大きな様子の木の立っている処に僅一枚板の橋が斜に架けてある。お品は橋の袂で一す立ち止った。そうして近づいた自分の家を見た。村落は台地に在るのでお品の家の後は直に斜に田圃へずり落ちそうな林である。櫓や雑木の間に短い竹が交っている。いい加減大きくなった櫓の木は皆葉が落ち尽している、その小枝を透して凹んだ棟が見える。白い羽の鶏が五六羽、がりがりと爪で土を掻き掃いては嘴でそこを啄いて又がりがりと土を掻き掃いては余念もなく夕方の飼料を求めつつ田圃から林へ還りつつある。お品は非常な注意を以て斜な橋を渡った。四足目にはもう田圃の土に立った。その時は日は疾に没して見渡す限り、田から林から世間は唯黄褐色に光ってそうしてまだ明るかった。お品は田圃からあがる前に天秤を卸して左へ曲った。自分の家の林と田との間には人の足跡だけの小径がつけてある。お品はその小径と林との境界を劃っている牛胡顔子の側に立った。鶏の爪の趾が其処の新らしい土を掻き散らしてあった。お品は土を手で聚めて草履の底でそくそくとならした。お品の姿が庭に見えた時には西風は忘れたように止んでいて、庭先の栗の木にぶつ懸けた大根の乾びた葉も動かなかった。白い鶏はお品の足もとへちょろちょろと駈けて来て何か欲しそうにけろつと見上げた。お品は平常のように鶏などへ構ってはおられなかった。お品は戸口に天秤を卸して突然

「おつう」と喚んだ。

「おっかあか」と直におつぎの返辭が威勢よく聞えた。それと同時に竈の火がひらひらと赤くお品の目に映った。朝から雨戸は開けないので内はうす闇くなっている。外の光を見ていたお品の目には直ぐにはおつぎの姿も見えなかったのである。戸口からではおつぎの身体は竈の火を掩

うていた。返辞すると共に身体を振ったのでその赤い火が見えたのである。

おつぎの背に居た与吉はお品の声を聞きつける

「まんまんま」と両手を出して下りようとする。お品はおつぎが帯を解いてる間に壁際の麦藁俵の側へ蕪蕪の手桶を二つ並べた。与吉はお袋の懷に抱かれて俵にも出もしない乳房を探った。お品は竈の前へ腰を掛けた。白い鶏は掛梯の代に掛けてある荒縄でぐるぐる捲にした竹の幹へ各自に爪を引っ掛けて両方の羽を拡げて身体の平均を保ちながら慌てたように嗶へあがった。そうして青い煙の中に凝然として目を閉じている。

お品は家に帰って幾らか暖まったがそれでも一日冷えた所為かぞくぞくするのが止まなかった。そうして後に近所で風呂を貰ってゆっくり暖まったら心持も癒るだろうと思った。竈には小さな鍋が懸っている。汁は蓋を漂わすようにしてぐらぐらと煮立っている。外もいつかとおぼり闇くなった。おつぎは竈の下から火のついている魚朶を一つとって手ランブを点けて上り框の柱へ懸けた。お品はおつぎが単衣へ半纏を引っ掛けたままであるのを見た。平常ならそんなことはないのだが自分が酷くぞくぞくとして心持が悪いのでつい気になって

「おつう、そんな姿で汝や寒かねえか」と聞いた。それから手拭の下から見えるおつぎのあどけない顔を凝然と見た。

「寒かあんめえな」おつぎは事もなげにいった。与吉は懷の中で頻りにせがんでいる。お品は平常のようでなく何も買って来なかったので、ふと困った。

「おつう、そこらに砂糖はなかったっけえ」お品はいった。おつぎは

黙って草履を脱棄して座敷へ駆けあがって、戸棚から小さな古い新聞紙の袋を探し出して、自分の手の平へ少し砂糖をつまみ出して

「そらそら」といいながら、手を出して待っている与吉へ遣った。おつ

ぎは砂糖の附いた自分の手を嘗めた。与吉はその砂糖をお袋の懷へこぼしながら危なそうにつまんで口へ入れる。砂糖が竭きた時与吉はそのべとついた手をお袋の口のあたりへ出した。お品は与吉の両手を攫って紙つてやった。お品は鍋の蓋をとって魚朶の焰を翳しながら

「こりゃ芋か何でえ」と聞いた。

「うむ、少し芋足して暖め返したんだ」

「おまんまは冷たかねえけ」

「それから雑炊でも拵えべと思つてたのよ」

お品は熱い物なら身体が暖まるだろうと思ひながら、自分は酷く懶いので何でもおつぎにさせていた。おつぎは粘り気のない麦の勝ったぼろぼろな飯を鍋に入れた。お品は魚朶を一燵ぶ突こんだ。おつぎは鍋を卸して茶釜を懸けた。ほうっと白く蒸気の立つ鍋の中をお玉杓子で二三度掻き立てておつぎは又蓋をした。おつぎは戸棚から膳を出して上り框へ置いた。柱に点けてある手ランブの光が届かぬのでおつぎは手探りでしている。お品は左手に抱いた与吉の口へ箸の先で少しずつ含ませながら雑炊をたべた。お品は芋を三つ四つ箸へ立てて与吉へ持たせた。与吉は手を口へ持っていつて直ぐに熱いというて泣いた。お品は与吉の頬をふうふうと吹いてそれから芋を自分の口で嚙んでやった。お品の茶碗はこうして冷えた。おつぎは冷たくなった時鍋のと換てやった。お品は欲しくもない雑炊を三杯までたべた。幾らか腹の中の暖かくなったのを感じた。そうして漸く水離れのした茶釜の湯を汲んで飲んだ。おつぎは庭

先の井戸端へ出て鍋へ一杯釣瓶の水をあけた、おつぎが戻った時「おつう、今夜でなくともええや」とお品はいった。おつぎは黙って俵の側の手桶へ手を掛けて

「これへも水入で置かなくっちゃなんめえ」
「そうすればええが大変だらええぞ」

お品がいい切らぬうちに、おつぎは庭へ出た。直ぐに洗った鍋と手桶を持って暗い庭先からぼんやり戸口へ姿を見せた。闕へ一寸手桶を置いてお品と顔を見合せた。手桶の水は半分で両方の蒔蕪へ水が乗った。

お品は三人連で東隣へ風呂を貰いに行った。東隣というのは大きな構で蔚然たる森に包まれている。

外は闇である。隣の森の杉がぞっくりと冴えた空へ突っ込んでいる。

お品の家は以前からこの森の為に日が余程南へ廻ってからでなければ庭へ光の射すことはなかった。お品の家族は何処までも日蔭者であった。それが後に成ってから方々に陸地測量部の三角測量台が建てられてその上に小さな旗がひらひらと閃くように成ってからその森が見通しに障るというので三四本だけ伐らせられた。杉の太木は西へ倒したのでずしんとそこらを恐ろしく撼がしてお品の庭へ横たわった。枝は挫けてその先が庭の土をさくった。それでも隣ではその木の始末をつける時にそこらへ散らばった小枝やその他の屑物はお品の家へ与えたので思い掛けない薪が出来たのと、も一つは幾らでも東が隙いたので、隣では自分の腕を斬られたようだと思しんだにも拘らずお品の家では切に悦んだのであった。それからというものはどんな姿にも日が朝から射すようになった。それでもさすがに森はあたりを威圧して夜になると殊に聳然として小さなお品の家は地べたへ黙つつけられたように見えた。

お品は闇の中へ消えた。そうして隣の戸口に現われた。隣の雇人は夜なべの縄を縛っていた。板の間の端へ胡坐を掻いて足で抑えた縄の端へ薬を継ぎ足し、継ぎ足してちよりちよりと額の上まで揉み挙げては右の手を臂へ廻してくっつく縄を抜く。縄はその度に土間へ落ちる。お品は板の間に小さくなっていった。やがて薬が竭きると、傭人は各自にその縄を足から手へ引つ掛けて迅速に数を計っては土間から手繰り上げながら、継がったまま一房ずつに括った。やがて彼等は板の間の薬屑を土間へ掃きおろしてそれから交代に風呂へ這入った。お品はそれを見ながら黙って待っていた。お品は此処へ来るとこういう遠慮をしなければならぬので、少しは遠くても風呂は外へ貰いに行くのであったがその晩はどこにも風呂が立たなかった。お品は二三軒そっちこっちと歩いて見てから隣の門を潜ったのであった。傭人は大釜の下にぼつぽと火を焚いてあたってゐる。風呂から出ても彼等は茹ったような赤い腿を出して火の側へ寄った。

「どうだね、一燵べあたらようがしょう、今直に明るから」と傭人がいつてくれてもお品は臂から冷えるのを我慢して凝然と辛棒していた。懷で眠った与吉を騒がすまいとしては足の痺れるので幾度か身体をもじもじ動かした。漸く風呂の明いた時はお品は待遠であつたので前後の考もなく急いで衣物をとった。与吉は幸いにぐったりと成つてお袋の懷から離れるのも知らないのとおつぎが小さな手で抱いた。お品は段々と身体が暖まるに連れて始めて蘇生したように恍惚とした。いつまでも沈んでいたいような心持がした。与吉が泣きはせぬかと心付いた時、洗いに洗いで出してしまった。それでも顔がつやつやとして髪が生際に拭いても拭いても汗ばんだ。そうしてしみじみと快かった。お品は衣物

を引掛けると直ぐと与吉を内懷へ入れた。お品の後へは下女が這入ったので、おつぎはその間待たねばならなかった。おつぎが出た時はお品の身体は冷め掛けていた。お品は自分が後ではいればよかったにと後悔した。

お品が自分の股引と足袋とおつぎに提げさせて帰った時は月は竊に隣の森の輪郭をはっきりとさせてその森の隙間が殊に明るく光っていた。世間がしみじみと冷えていた。お品は薄い垢じみた蒲団へくるまると、身体が又ぞくぞくとして膝がしらが氷ったように成っていたのを知った。

二

次の朝お品はまだ戸の隙間から薄ら明りの射したばかりに眼が覺めた。枕を擡げて見たが頭の心がしくしくと痛むようになく重かった。狭い家の内に羽叩く鶏の音がけたたましく耳の底へ響いた。おつぎはまだやすやすとして眠っている。戸の隙間が臉を開いたように明るくなった時鶏が復た甲走って鳴いた。お品はおつぎを今朝は緩くりさせてやろうと思っていた。それでもおつぎは鶏が又鳴いた時むっくり起きた。いつもと違って余りひっそりしているので驚いたようにあたりを見た。そうしてお袋がまだ自分の傍に蒲団へくるまってるのを見た。

「おつう、せかねえでもええぞ、俺ら今朝少し工合が悪いから緩くりすつかんよ」お品はいった。おつぎは暫くもじもじしながら帯を締めて大戸を一枚がらがらと開けて目をこすりながら庭へ出た。井戸端の桶には芋が少しばかり水に浸してあって、その水には水がガラス板位に閉じている。おつぎは鍋をいつも磨いている砥石の破片で水を叩いて見た。お

つぎは大戸を開け放して置いたので朝の寒さが侵入したのに気がついて「おつかあ、寒かかったか、俺ら知らねえでいた」いいながら大戸をがらがらと閉めた。闇くなった家の内には竈の火のみの勢いよく赤く立った。おつぎは

「お冷てえ」といいながら竈の口から捲れて出る焰へ手を翳して「今朝は芋の水氷ったんだよ」とお袋の方を向いていった。

「うむ、霜も降ったようだな」お品は力なくいった。戸口を後にしてお品は竈の火のべろべろと燃え上るのを見た。

「何処でも真白だよ」おつぎは竹の火箸で落葉を掻き立てながらいった。

「夜明にひどく冷々したっけかな」お品はいつて一寸首を擡げながら「俺ら今朝はたべたかねえかな、汝構あねえで出来たらたべた方がええぞ」お品はいった。又氷った飯で雑炊が煮られた。

「おつかあ、ちつとでもやらねえか」おつぎは茶碗をお袋の枕元へ出した。雑炊の焦げついたような臭いがぶんと鼻を衝いた時お品は箸を執って見ようかと思って俯伏しになって見たが、直に厭になつてしまった。

お品が動いたので懷の与吉は泣き出した。お品は俯伏したまま乳房を含ませた。そうして又芋の串を拵えて持たせた。

お品が表の大戸を開けさせた時は日がきらきらと東隣の森越しに庭へ射し掛けてきっかりと日蔭を限って解け残った霜が白く見えていた。庭先の栗の木の枯葉からも枝へ掛けた大根の葉からも霜が解けて雪がまだぼたりぼたりと垂ていた。庭へ敷いてある庭蓋の葉も只ぐっしりと湿っている。冬になると霜柱が立つので庭へはみんな藁屑だの蕎麦幹だのが一杯に敷かれる。それが庭蓋である。霜柱が庭から先の桑畑にぐらりぐらりと倒れつつある。

お品は蒲団の中でもめっきり暖かく成ったことを感じた。時々枕を擡げて戸口から外を見る。そうしては麦藁俵の側に置いた蒟蒻の手桶をどるかすると無意識に見つめる。横に成っている目からは東隣の森の梢が妙に変わって見えるので凝然と見つめては目が疲れるように成るので又蒟蒻の手桶へ目を移したりした。お品はどうかして少しでも蒟蒻を減らして置きたいと思った。お品はその内に起きられるだろうと考えつつ時々うとうと成る。

「切干でも切ったもんだかな」おつぎが庭から大きな声でいった時お品はふと枕を擡げた。それでおつぎの声は意味も解らずに微かに耳に入った。

暫くたってからお品は庭でおつぎがざあと水を汲んでは又間を隔ててざあと水を汲んでいるのを聞いた。おつぎは大根を洗った。おつぎは庭蓋の上に筵を敷いて暖かい日光に浴しながら切干を切りはじめた。大根を横に幾つかに切って、更にそれを縦に割って短冊形に刻む。おつぎは飯台へ渡した俎板の上へとんと庖丁を落してはその庖丁で白く刻まれた大根を飯台の中へ抜き落す。お品は切干を刻む音を聞いた時先刻のは大根を洗っていたのだなと思った。お品は二三日以来もう切干も切らなければならぬと自分が口について云ったことを思い出して、おつぎが能く機転を利かしたと心で悦んだ。庖丁の音が雨戸の外に近く聞える。お品は身体を半分蒲団からずり出して見たら、手拭で髪を包んで少し前屈みになっているおつぎの後姿が見えた。

「大根は分ったのか」お品は聞いた。

「分ってるよ」おつぎは庖丁の手を止めて横を向て返辞した。お品は又蒲団へくるまった。そうしてまだ下手な庖丁の音を聞いた。お品の懷に

いた与吉は退屈してせがみ出した。おつぎはそれを聞いて「そうら、姉が処へでも来て見る」といいながら忙しくぼっと一燵べ落葉を燃して衣物を炙つて与吉へ着せた。

「よきは利口だから姉が処に居るんだぞ」お品はいった。おつぎは自分の筵の上へ抱いて行つた。おつぎの手は落葉の埃で汚れていた。再び庖丁を持った時大根には指の趾がついた。おつぎはその手を半纏で拭つた。与吉は側で刻まれた大根へ手を出す。

「危険よ、さあこれでも持っている」おつぎは切り掛けの大根をやつた。与吉は直にそれを嚙つた。

「辛くて仕ようあんめえなよきは」おつぎは甘やかすようにいった。お品にはそれが能く聞えて二人がどんなことをしているのか分つた。お品の耳には続いて

「ほうんとしたか、そらそっちへ行っちゃった」という声がしたかと思うと

「こんだはほうんとすんじゃねえかんな」という声やそれから又

「それ持ち出すんじゃねえ、聴かねえとこれで切つてやんぞ、赤まんまが出るぞお痛え」などとおつぎのいうのが聞えた。その度に庖丁の音が止む。お品には与吉が悪戯をしたり、おつぎが痛いといつて指を啣えて見せれば与吉も自分の手を口へ当ているのが目に見えるようである。

お品はおつぎを平常からやかましくしていたので余所の子よりも割合に動けると思つているけれど、与吉と巫山戯たりしているのを見るとまだ子供だということが念頭に浮ぶ。自分が勘次と相知つたのは十六の秋である。おつぎはこうして大人らしく成るであろうかと何時になくそんなことを思つた。おつぎは十五であつた。

午餐もお品は欲しくなかった。自分でも今日は商に出られないと諦めた。明日に成ったらばと思つていた。然しそれは空願であつた。お品は依然として枕を離れられない。さすがに不安の念が先に立つた。お品はつい近頃行つた勘次の事が頻りに思い出されて、こつちであれ程働いて行つたのにきつと休みもしないで銭取をしているのだらうと思うと、寒くてもシャツ一つになつて、後にはそのシャツの端が抜け出して能く臍が出ることや、夜になると能く骨がみりみりする様だといつたことが、目の前にあるようで何だか逢いたくて堪らぬような心持がするのであつた。

勘次は利根川の開鑿工事へ行つていた。秋の頃から土方が勧誘に来て大分甘い啗をされたのでこの近村からも五六人募集に応じた。勘次は工事がどんなことも能く知らなかつたが一日の時間が五十銭以上にもなるというので、それがその季節としては法外な値段なのに惚れ込んでしまったのである。工事の場所は霞ヶ浦に近い低地で、洪水が一旦岸の草を没すと湖水は拡大して川と一つに只白々と氾濫するのを、人工で築かれた堤防が僅に湖水と川とを区別するあたりである。勘次は自分の土地と比較して茫々たるあたりの容子に呑まれた。そうして工夫等に権柄にこき使われた。

勘次は愈儲われて行くとなつた時収穫を急いだ。冬至が近づく頃には田はいうまでもなく畑の半でも大根でもそれぞれ始末しなくてはならぬ。勘次はお品が起きて竈の火を点けるうちには庭蓋へ粃の銚を干したりそれから独りで磨臼を挽いたりして、それから大根も干したり土へ活かたりして闇いから闇いまで働いた。それでも粃が少しと畑が少し残つたのをお品がどうにかするといつたので出て行つたのである。

工事の箇所へは二十里もあつた。勘次は行けば直に銭になると思つたので漸く一円ばかりの財布を懐にした。弁当をうんと背負つたので目的地へつくまでは渡銭の外には一銭も要らなかつた。

勘次は夜ついてその次の日には疲れた身体で仕事に出た。彼は半日も無駄な飯を喰うことを恐れた。然しその次の日は過激な労働から俗にぞら手というて手の筋が痛んだので二三日仕事に出られなかつた。それから六七日たつて烈しい西風が吹いた。勘次は薄い蒲団へくるまつて日の中から冷えてた足が暖らなかつた。うとうとと熟睡することも出来ないで輾転して長い夜を漸く明した。

その次の日は彼は硬ばつたように感ずる手を動かして冷たいシャベルの柄を執つて泥にくるまつていた。そうしている処へ村の近所のものがひょこり尋ねて来たので彼は狐にでも魅まれたように只驚いた。近所の者は大勢が只泥のようになって動いているのでそれがどうとも識別がつかないで困つたといつて、勘次に逢うたことを反覆して只悦んだ。途中へ一晚泊つたというようなことをいって勘次が心忙しく聞くまでは理由をいわなかつた。勘次は漸くお品に頼まれて来たのだといふことを知つた、勘次はお品が病気に罹つたのだといふことを聞いて万一かという懸念がぎっくり胸にこたえた。そうして反覆してどんな塩梅だと聞いた。嘸の容子ではそれ程でもないのかと思つても見たが、それでも勘次は口を利くにも唾が喉からぐつと突つ返して来るようで落付かなくなつた。

その日の夜中に彼等は立つた。勘次は自分も急ぐし使を疲れた足で歩かせることも出来ないで霞ヶ浦を汽船で土浦の町へ出た。夜は汽船で明けたがどうしたのか途中で故障が出来たので土浦へ着いたのは、予定の時間よりは遙に後れていた。土浦の町で勘次は鰯を一包み買つて手拭

で括くくってぶらさげた。土浦から彼は疲れた足を後に捨てて自分は力の限り歩いた。それでも村へはいった時は行き違ちがう人がぼんやり分る位で自分の戸口に立った時、薄暗い手ランブが柱に懸かつて燻くもぶっていた。勘次はひっそりとした家のなかに直に蒲団へくるまつているお品の姿を見た。それからお品の足を描えっているおつぎに目を移した。

勘次は大戸をがらりと開けて闕しりぞを跨またいだ時何もいわずに只

「どうしてえ」というのが先であつた。お品は勘次の声を聞いて思わず枕を動かして

「勘次さんか」といって更に

「南のおとつあは行き違ちがひにでもならなかつたんべかな」といった。

「行逢いつたよ、そんだがお前まへどんな塩梅しんばいなんだ」

「俺おれらそれ程でねえと思つていたが三四日横に成つたきりでなあ、それでも今日等けふちはちつたあええようだからこの分じや直に吹ふ返かへすかとも思つてんのよ」

「そんじやよかつた、俺おれら只じや歩いててもよかつたが、南とこ又歩かせちや済しままねえから同志に土浦まで汽船きせんで乗のつ着つけたんだが、南は草臥くたひれたもんだから俺おれら先へ出たんだがな、南もあの分じや今夜もなかなか容易やすじゃあんめえよ、それに汽船が又後あとれつちやつてな」

勘次はいいながら草鞋わらじをとつた。手拭の端へ括くくつて来た鰯いわしの包みをかざりとお品の枕元へ投なげて、首へつけていた風呂敷包をどざりと置いて勘次は庭へ出て足を洗つた。勘次はお品の枕元へ座を占めた。

「そんなに悪くなくつちやそれでもよかつた。俺おれらどうしたかと思つてな」勘次は改めて又いった。

「お品おまんまは喰くべてか」勘次はつけ足した。

「先刻さつぎおつうに米のお粥けんと炊いいて貰もらつてそれでもやつと掻かつ込んだところよ」

「それじやどうだ、途中で見付けて来たんだから一疋ひとやつて見ねえか」勘次は手ランブをお品の枕元へ持つて来て鰯いわしの包を解ひいた。鰯いわしは手ランブの光できらきらと青く見えた。

「ほんによなあ」お品は俯伏ふふくしになつてこういった。

「おつう、其処へ火でも吹ふつたけて見ねえか」勘次はいった。

「勘次さんそら大変だつたな、俺おれらそんなに要あらなかつたな」

「今だから何時いつまでも保もつよ、そうしてお前まへも力ちからつけろな」

「汽船きせんに乗のつて来たつて余あまつ程費用かひりも掛かつたんべな」

「そうよ、二人で六十錢ばかりだがこれは俺おれ出したのよ、南に出させる訳にも行かねえかん」

「それじや稼かせえた錢ぜにそれだけ立投たちなげにしつちやつたな」

「そもそも財布さいふにやまあだ有るよ、七日ばかり働はたえてそれでも二両は残つたかな、そんで又行く筈はずで前借まかり少しして来たんだ、こつちの方から行つてる連中が保証してくれてな」勘次は誇うり顔にいった。

「俺おれら今日見てえだらええが、酷くく行逢いいたくなくてなあ」お品は俯伏ふふくした顔を枕につけた。

「どうせ此処ここの始末もしねえで行つたんだから、一遍は途中で帰かへつて見なくつちや成ならねえのだから同じ事だよ」勘次はお品を覗のぞき込こみようにしていった。

「それでも俵はたけにしちや置いたな」勘次は壁際の麦藁俵わらわらを見ていった。お品はまだ俯伏ふふくしたままである。

「あつちにいちゃ錢かねは要あらねえな、煙草一服吸うべえじやなし、十五日

目が晦日でそれまでは勘定なしでその間は米でも薪でもみんな通帳で借りて置く位なんだから、十五日目に成らなくっちゃ財布も膨れねえが、又百でも出っことはねえかな」勘次は更に出先のことをお品へ聞かせた。

「米ばかり炊えても毎日一升ずつは要る位だから骨も随分折れんが出せえすりや二貫と三貫は残せつから、帰るまでに俺もどうにか成ると思つてんのよ、そうすりや塩鮭位は買あことも出来らな」

「そんなやよかった、土方なんちゃ碌な奴等は居ねえっていうからどうしたかと思つてな」お品は首を掻げた。

「そんな奴等と交際した日にや限はねえが、隅の方にちぢまつてりや何ともゆわねえな」勘次がついている間におつぎが枯粗朶を折て火鉢へ火を起した。勘次は火箸を渡して鰯を三つばかり乗せた。鰯の油がじりじりと垂れて青い焰が立った。鰯の臭が薄い煙と共に室内に満ちた。そうしてその臭がお品の食欲を促した。お品は俯伏したなりで煙臭くなった鰯を喰べた。

「どうして塩辛かあ有んめえ」

「さすが佳味えな」

「これでもここの商人は持つちや来ねえぞ」勘次は一心に見ながらいった。

お品は二匹へ手をつけて箸を置きながら懷で眠っている与吉を覗いて「起きていたら大騒ぎだんべ」といった。

「いまっとたべろな」勘次はいった。

「沢山だよ、おつうげもやってくろうな」

「俺も飯でも食おうかえ」勘次は風呂敷包から弁当の残を出して冷たいままぶすぶす嚙った。

「おつう、お茶は冷めなくなつたっけかな」お品はいった。

「要ねえぞ仕事に出入りや毎日こうだ」勘次は梅干を少しずつ嘗め減らした。弁当が尽きてから勘次は鰯をおつぎへ挟んでやった。そうして自分でも一口たべた。

「こりや佳味えこたあ佳味えが余りあまくつて俺がにや胸が悪くなるよ」勘次は冷めた湯を幾杯か傾けた。勘次は風呂敷から袋を出してお品の枕元へ置いて

「米これだけ残つたから持つて来たんだ、あっちに居ればええが幾日も明けると炊かれちやつても仕ようねえかな、そんなやこりやおつうげやつて置くん」

勘次は米の小さな袋をおつぎへ渡した。

「袋なんぞ又何だと思つたよ」お品は軽くいった。

「それでも薪は持つて来る訳にも行かねえから置いて来つちやつた」勘次は自ら嘲るように目から口へ掛けて冷たい笑が動いた。

「お品、足でもさすつてやんべえじゃねえか」勘次はお品の裾の方へ行つた。

「ええよ勘次さん、俺ら今日は目のうちから心持ええんだから、先刻もおつうが揃つてやんべえなんというもんだから少しもやつてくろつて云つたところだよ、こんじゃ二三日も過ぎたら勘次さんは又行けべえよ」お品は快よげにいった。

「今夜はひどく心持ええんだよ、ええよ本当だよ勘次さん、お前草臥たんべえな」更にお品は威勢がついていった。

夜は深けた。外の闇は氷つたかと思うように唯しんとした。蒟蒻の水にも紙の如き氷が閉じた。

次の朝霜は白く庭蓋の藁（わら）におりた。切干（きかん）の筵（むしろ）は三枚ばかりその庭蓋の上に敷いたままで、切干には水を粉末にしたような霜が凝（こも）っていて、東の森の隙間から射し透す朝日にきらきらと光った。白い切干は蒸さずに干したのであった。切干は雨が降らねば埃（ほこり）だらけに成るうが芥（かひ）が交るうが昼も夜も筵を敷き放しである。

勘次は霜柱の立てる小徑（せうけい）を南へ行つた。昨夜遅（おそ）かつたことやら何やら断（はなし）をして暇（ひま）だった。庭先から続く小さな桑畑の向に家が見えるので、平生それを勘次の家でも唯南とのみいつている。彼が薦（すす）つく、こを担（か）いで帰つて来た時は日向（ひなた）の霜が少し解けて粘（ねり）ついていた。お品は勘次が一寸の間居なく成つたので酷（ひど）く寂（さび）しかった。この朝になつてからもお品の容態がいいので勘次ははつと安心した。そうして斜に遠くから射す冬の目を浴びながら庭蓋の上に筵を敷いて俵（わら）を編みはじめた。薦（すす）つく、こは両端に足が附いている。丁度荷鞍（にせ）の骨のような簡単な道具である。その足から足へ渡した棒へ藁を一捆（つか）みずつ当てては八人坊主をあちへこちへ打（う）つ違（ちが）いながら繩を締めつつ編むのである。八人坊主というのはその繩を捲（ま）きたいわば小さな錘（つち）である、八つあるので八人坊主といっている。小作米を入れる藁俵（わら）を四五俵分作らねば成らぬことが稼（かせ）ぎに出る時から彼には心掛りであった。すぐった藁も繩も別に取（と）って置（お）きながら只忙（いそ）しくて放棄（ほうき）して出て行つたのである。

お品は毎日閉め切つていた表の雨戸を一枚だけ開けさせた。からりとした蒼（あお）い空が見えて日が自分の居る蒲団（ぼたん）に近くまで僣（は）つた。お品はこれまでは明るい外を見ようと思うには余りに心が鬱（ふさ）していた。お品は庭先

の栗の木から垂れた大根（だいこん）が褐色（かっしやく）に干（かわ）いているのを見た。おつぎも勘次の横へ筵を敷いて又大根を切っている。その庖丁（ばうてい）のとんとん鳴る間に忙しく八人坊主を動かしてはさらさらと藁（わら）を扱（と）く音が微（か）かに交（まじ）つて聞える。お品は二人の姿を前にして酷（ひど）く心強く感じた。その日は栗の木に懸けた大根の動かぬ程穩かな日であった。お品はこの分で行けば一枚紙（かみ）を剝（は）くように快よくなることと確信した。勘次は藁俵（わら）を編み了えて、そうして端を縛（むす）つた小さな藁の束を丸く開いて、それを足の底に踏んで踵（かかと）を中心（しん）に手と足を筆規（ひつぎ）のようにしてぐるぐると廻りながら丸い俵（わら）ぼちちを作つた。勘次はお品がどうにか始末をして置いた藁俵（わら）を明けて仕上げた計りの藁俵へ米を量り込んだ。米には赤い粒もあったが藁（わら）が少し交つていてそれが目に立つた。

「藁（わら）が少ししかかつたな」勘次はふとそういつた。

「そうだっけかな、それでも俺（おれ）ら唐箕（からこし）は強く立てた積（つみ）んだがなよ、今年（ことし）は赤も夥（しうご）ろだが磨（こ）臼（うす）の切れ方もどういふもんだか悪いんだよ」とお品は少し身を動かして分（ぶん）疏（そ）するようにいつた。

「尤もこの位（くらい）じゃ且（かつ）那（な）も大目に見てくれればえから心配（しんぱい）はあんめえがなよ」勘次は直にお品の病氣（びやうき）に心付いてこういつた。壁際（かみぎは）には藁（わら）の器用な俵（わら）が規則正しく積み換（か）えられた。お品はそれを一心に見た。それもお品を快よくする一つであった。勘次は俵（わら）の側の手桶（てぶくろ）の蓋をとって

「こりや藁（わら）藪（やぶ）だな」といつた。

「俺（おれ）らそれ仕入（しに）たつきり起（た）られねえんだよ」お品は枕（まくら）を手で動かしていつた。勘次は又蓋をした。

静かな空をじりじりと移（うつ）つて行く日が傾（か）いたかと思うと一散（ひと）に落ちはじめた。冬（ふゆ）の日（ひ）はもう短い頂点（ていてん）に達（いた）しているのである。勘次はまだ日が